NEWSLETTER
保育・子育て総合研究機構だより

2007.6.1発行　NO.3

社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

巻頭言　研究企画委員会および研究機構が関与する最近の動き

３月、４月の研究企画委員会は、もっぱら５月18日開催予定の公開セミナー「保育の質を高めるために…ニュージーランドの評価方法を体験で学ぶ」の準備が中心となりました。

１つはまず、ニュージーランドの保育カリキュラムである「テ･ファアリキ」とそれに基づく評価基準「ケイ・ツア・オ・テ・パエ」を理解することでした。

「テ・ファアリキ」の日本語版はまだ出版されていません。英語版のテキストと森眞理氏の解説をもとに少し勉強しました。

「ケイ・ツア・オ・テ・パエ」は英語版のテキストさえ入手できていませんでしたが、ドーリーン・ロンダーさんの予稿と森氏の解説により、ラーニング・ストーリー（エピソード記述のようなものと理解）をもとに保育を評価していく手法、とひとまず受けとめました。

ここでいう「評価」とは、ストーリーで記述された保育がどんな意味をもつものであったのか、子どもにとって、また大人にとって、どんな学びをもたらしたのかを、そこでの保育者のかかわりも含めて共同的に分析していくことのようです。正しい紹介は、後日だされるはずの報告を待ってください。

２つめは、もちろんこちらが中心ですが、ロンダーさんの講演を受けて第２部で行うワークショップをどのように組み立てるかの企画です。

鈴木眞廣さんが「まな板の上の鯉」になってくれることになり、和光保育園の保育をビデオで撮り、そこから切りとったものを映しながらストーリーを語る、さらにそれをどう評価するか、ロンダーさん、そしてできれば会場の参加者も含めて行うことができたらワークショップといえるだろう、そんな企画を立てました。

はたしてねらいどおりにいくか、このニューズレターが出る頃には結果は出ています。

「新しい保育指針への提言」研究グループは、５月20日に保育学会で行う自主シンポジウムの準備のための集まりを３月にもちました。メンバーである藤光真さんが、「一人の強烈な個性をもつ子を受け入れていくクラスの仲間」の事例を、浅野君枝さんが「保育参加を通した保護者との保育の共有」の事例を、室田一樹さんが「年度移行期に自ら参加した保育の省察を通して指導計画のあり方を考える」の事例をもとに提案し、鯨岡峻、榎沢良彦両氏からコメントと補足の提案をいただくというプログラムを組み立てました。

この研究グループは、中間報告に寄せられた意見その他をもとに最終報告をまとめていくことになりますが、研究企画委員会としても、これをどう発展させていくか、考えていきたいと思います。

もう１つ、「１、２歳児保育の現状と課題」研究グループが発足しました。メンバーは今井和子（東京成徳大学教授）、近藤幹生（白梅学園短期大学准教授）、神田英雄（桜花学園大学教授）の３氏を中心に、現場の園長・保育者を数名加えて構成されます。

まずは研究のベースとして実態調査から、ということで会員名簿をもとに無作為抽出で、園長と１、２歳児担当保育士宛てのアンケート調査を行い、平行してインタビュー調査も行う予定です。

今、量的には急拡大しているのが１、２歳児保育、幼稚園の２歳児保育の動きもあります。子どもの自己形成のうえでだいじな意味をもつ１、２歳児期の保育ですが、あまり深められていないのではないか、という問題意識が研究のベースにあります。

ぜひ、ご協力をお願いいたします。

（遠山洋一●保育・子育て総合研究機構研究企画委員会委員長）

REPORT

諸外国の保育と対話しよう…米国 「共同性」と「わかちあい」を育む 保育園と実践研究

★子育ては「共同性」をもって

「子育てという文化にも、共同性を取り戻さなければならないのが、今の時代だと思います。…子育てが専門家任せになり、親として成長するチャンスが奪われてしまうとしたらどうでしょうか」

「ニューズレター」第２号で、千葉・和光保育園園長の鈴木眞廣さんが、「サービス」という名のもと、売り手（保育園）と買い手（保護者）という関係へと邁進する日本社会の子育てのあり方を考え直してみませんか？　と保育に携わる一人ひとりに語りかけました。「預けっぱなし」「子育ての分業化」の場である保育園から「お互いさま」「子育ての共同化」の関係づくりの場としての保育園へと変容することが、今、大切な課題であることを痛感させられます。

これは、日本特有のことでしょうか。諸外国の保育を概観してみると、保護者との関係について、日々向き合い模索しているのは、日本に限ったことではないことがわかります。「共同性」を育むためにどのような「わかちあい」を実践しているのか、米国・ニューヨークの保育園の実践を見ることにしましょう。

★ニューヨーク子育て事情

「ニューヨーク」と聞くと、大都市、働く女性が多い、眠らない街等、メディアで描かれているイメージが思い浮かぶのでは？　それでは「子育て」についてはいかがですか？　意外と知られていないかもしれませんね。毎年、保育園や幼稚園のランキングともいえるガイドブックが出版され、生まれる前から「ウェイティング・リスト」（待機児リスト）がいっぱいになる私立保育園がある一方、定数に満たない園もあり、まさに、熾烈な「市場競争原理」が働いています。

「オープン・ハウス」は保護者のわかちあいの場

そうした中、競争原理だけで保育が展開しないように職能団体である「NAEYC」（全米乳幼児教育協会／研究者や実践者等、10万人弱の会員）では、『DAP』（Developmentally Appropriate Practice／「質の高い保育実践」についてのガイドライン／日本語版は『発達にふさわしい保育教育実践』〈東洋館出版〉）を発刊して、子どもの視線に立つ保育実践を示しています。

その中で、「**保育・幼児教育施設は、保護者とパートナーシップ（共同・仲間関係）を築くこと**」が強調されているのです。ニューヨークの保育園においても、このことは課題として、子どもの最善の利益となるための工夫が凝らされています。

★オープン・ハウス

…「はじめの一歩」はともに生活体験することから

『リタ＝ゴールド・アーリーチャイルド・センター』（子どもと家族のセンター）は、コロンビア大学教育大学院（ティーチャーズ・カレッジ）の付属保育園で、大学院教職員・学生の子ども・家族を対象として、子どもの全人格発達を、さまざまな遊びからの学びを通して支え育むこと、そしてセンターの名の通り、保護者との共同的な関係性の育みを大切にしています。

まず、それは保護者と子どもとが一緒に保育園の生活体験することからはじまります。子どもが遊ぶ傍らで、保護者との語らい（面接といったフォーマルな雰囲気ではなく）のときをもちます。子どもは、保護者が保育者と話している姿を見て、安心感・信頼感を抱くことへとつながるでしょう。保護者も子どもがどのように遊ぶのかを見て保育者と話すことから、子どもの多面的理解へとつながるでしょう。また、保護者どうしの出会いとわかちあいの場ともなることでしょう。

こうした「はじめの一歩」の積み重ねが、「オープン・ハウス」という保育園開放のとき（滞在時間は保護者が自由に選択できる）や「ファミリーデー」として食事等の持ち寄りパーティーのときとして、年に数回もたれ、ひらかれた保育園として保育内容や評価のあり方をわかちあうときが計画・実践されています。

まさに、共同性とわかちあいが行われているのです。

★実践の場における研究に向けて

こうした実践は、一方的にセンターが決めて保護者が従うといった経緯ではじまったのではありません。実践研究により実を結んだのです。

「研究」という言葉は、緊張感をもたらすことがあります。しかし、**研究とは、個人やグループの問題意識を、ある方法により調べ、分析・解釈し、社会貢献や変容をもたらせる活動**です。リタ＝ゴールド・センターの場合も、「どのようにしたら、保護者と子育てを共有できるか」という問題意識が研究となり、実践の変容につながったのです。

「あれ？」「何だろう？」という問題意識や自己課題を探ることが研究の醍醐味です。そして、それは自園の変容のみならず、社会や世界への変容につながる活動なのです。この研究機構が、保育者間の共同性とわかちあいの場となることを楽しみにしています。

（**森 眞理**●東洋英和女学院大学准教授）

学びの軌跡

子どものその子らしさにつながる保育士の懐の深さ
…さかえ保育園の園内研修からの学び

■保護者の眼差しが変わってきた

昨年３月、在園児の保護者に「新入園児説明会で、園の印象を伝えてほしい」とお願いしたところ、「どの先生に聞いても、わが子のことをしっかり見てくれていることに大きな信頼を寄せている。子どもがけんかをしているとき、止めないで見守っている姿は、親にはできない。子どもどうしで話し合い、解決していくまで子どもを信頼しきっているここの保育園は、質の高い保育をしているので、自分も勉強になる」といってくださり、本当に嬉しかったです。きっと、新入園児の保護者にとっては、園長が説明するよりも信頼の高いメッセージだったと思います。

「どのように育ってほしいか」と新入園児の保護者に尋ねたところ、皆さんが「逞しく育ってほしい」といわれたのには驚きました。まさに、当園児の「逞しさ」は私自身もうらやましく思うほどです。子どもたちは自分を素直に表現し、子どもどうしのかかわりの知恵や工夫を日々磨き、意欲が違います。自然の中でチャレンジしていく想像的で創造性に溢れた遊びにより、子どもたちは「逞しさ」を身につけています。

それにしても、けんかもケガもある危険極まりない環境を承知で当園を選ぶのは、相当勇気のいることだと思うのですが…。

■尊厳の眼差しへと変わってきた

今、当園の保育者の共通意識は「子どもから学ぶ」がキーワードになっています。「子どもの行動には、必ず意味がある」、子どもに“良い・悪い”がないこと、「子どもは天才かもしれない、将来、科学者になるかもしれない」など、子どもが行動するには、一つひとつに好奇心や洞察力が大きなエネルギーとなっていることがわかってきたようです。そして、「**幼子は、神様からお預かりした大切な宝物**」だという当園の理念が真理だとわかりかけてきたようなのです。

子ども一人ひとりに「近づき」「観察」していくプロセスの中で、私たち大人が「**子どもの存在に対し、尊厳の眼差しへと変わってきた**」ことは、大きな財産になってきています。保育者も、子どもの中で切り替える力、解決していく力を「信じる」ことができたとき、子どもの行動を待てるし、穏やかに語りかけることが生まれていきます。今、抱きしめるのか、何をすべきなのかが見えてくるので、これは不思議な力です。

「**保育者の懐の深さ**」がさらに深くなっていくのは、この**子どもの存在に対する尊厳の眼差し**が根底に生じたときかもしれません。これは、当園の重要な研究テーマになっています。

■保育者のかかわりが変わると子どもも変わる

子どもは、自分が大切にされているのを感じたとき、心の内を素直に表現するようになってきます。子ども自身が、自分らしい自分でいていいのだと思えるとき、子どもも保育者も無理のない関係性と環境が創られていくことに気づきました。これらの気づきは、園内研修の成果でした。

私たちのまわりには、さまざまな研修が用意され、知識や情報が溢れていますが、目の前にいる「子どもから学ぶ」ことが、子どもとの関係性を築いていける早道で、子どもは一人として同じ人がいないことに気づきました。だからこそ、今、目の前にいる子どもの行動の意味を、保育者がどれだけ汲みとれるかが、子

どもとの関係性を築く１つの方法だと考えるようになってきたのです。

■園内研修で子どもの見方、かかわり方が変わった

ここまでに到達するには葛藤の連続、工夫の積み重ねがあり、今も進化し続けています。

まず、小山田治子氏を迎えて、交流分析、自己理解、他者理解の園内研修を行い、次に、現場で抱えている課題は何かを自分たちだけで考えはじめました。保育環境を改善するグループ、子どもの歩き方と靴の関係を研究するグループに分かれ、１年間研究を続け、翌年１月に発表するパターンが確立していきました。

さらに翌年は、保育者自身が研究してみたいテーマを出し合い、自然と子ども、気になる子、保育環境のグループで研究してみました。各グループでのまとめを園内研修で発表し、さらに一歩進化して、保護者会、クラス懇談会の場で保護者にも伝えました。

■「ドキュメンテーション」にチャレンジ

Ｎ職員が、全私保連主催のニュージランド研修後に提案したのが「ドキュメンテーション[*1]」でした。これは「子どもの観察記録」と「事例研究」で、家族と保育者が子どもの育ちと学びの価値観を共有できるよう、視覚的に伝えていこうという内容でした。この提案を模索しながら実験的に進め、保育者が一人の子どもを１年間観察し、記録する方式をとることにしました。

＊新人保育者の記録（抜粋）

１～２歳児クラス・２歳男児うちわづくりの場面

野菜スタンプ押しに誘われるが「何で？」と聞き返し、行こうとしない。何度か誘われて、スタンプのほうに移動する。スタンプを押すとき、すぐに押さず、絵の具のついた部分をじっくりと見る。紙の手触りを確かめる。終了後に手を洗うとき、水道の中を覗き込み、水の落ちる方向をじっくりと見ている。

＊プロジェクターに映し出されたＫ君の姿を見ながら、発表を聞いていたベテラン保育者の気づき

Ｋ君の行動が気になっていたのは、生活の流れを重視してクラスを見ていて、一人ひとりを見ないでいたのだと気づいたんだね。Ｋ君は科学者の目をした人だったんだね。

■「関与観察」の提案

2006年５月、観察者は観察する場面の一員として、関与しながら観察をする「関与観察」と、エピソードの記録方法などをＮ職員が提案しました。これは、「かかわり・感じる」主観的な自分と、起きている事実を客観的に見る両方の目が必要となること、「メモはとらない。頭で覚えておく」など、新提案でした。

この「関与観察」、「エピソード」は、鯨岡峻氏の『エピソード記述入門』（東京大学出版会）を読んで「これだ」と思ったとＮ職員はいいます。この関与には「自分」が入っており、日々の保育を切り取ることは、保育者にとってごく自然であり、子どもとのかかわりを発見する機会となるごく日常の視点でした。

また、相談の事例研究や私が個人的にかかわる緩和医療スタッフのカンファレンスでは、一人の方に「自分のかかわり」がどんな影響を与えたかを振り返り、チームで共有化していくことが日常的になされていますが、保育現場ではカンファレンスする機会があまりにも少なく、ここに課題があるのかもしれません。

このように、当園の園内研修は模索、チャレンジし、今も進化し続けています。

（川副孝夫●千葉・さかえ保育園園長）

＊１　定義がむずかしいが、ニュージランドで行っていた方法は、テ・ファアリキの視点をもって子どもの行動を切り取り、子どもの成長・学びのプロセスを描くこと。保育室に掲示した作品はその子のファイルに入れ、親に伝え、親と共有化し、子ども自身も自分のことを認識し、次につながるシステム。保育現場だけでなく、親も日常の家庭で起こったことを伝えるこのシステムは、計りしれない連帯感を生み出し、学びの軌跡へとつながる。

編集後記

◎広がりと重なりのもつ意味

保育所保育指針の改定作業が進む中、遠山委員長の原稿にあるように、**当研究機構では、「テ・ファアリキ」を題材にした研究企画を模索しはじめました。**日本の保育研究は、世界の動向や実態を見すえながら広がる一方で、１、２歳児に対する保育のノウハウは、長年にわたる実践の積み重ねと制度面の支えもあって、一定の高い水準をもった国であるといえるでしょう。だからこそ、あらためて「１、２歳児保育の現状と課題」を研究するグループも発足し、一層の積み重ねを画したいと思います。

「**子どもの行動には意味がある**」。これは川副委員の原稿の一節です。もしかして、**私たちの仕事の根本は、子どもの行動の意味を知り、それに応える術を見出すこと**かもしれません。そのために、**研究は広がり、深まる（積み重ねる）**のでしょう。

（片山喜章●神戸市・なかはら保育園園長）

❖問合せ
社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880／ FAX 03-3865-3879
URL http://www.zenshihoren.or.jp
E-mail ans@zenshihoren.or.jp